

[書 評]

「読むことと書くこと」

François Furet  
Jacques Ozouf 共著

鈴木正昭

世紀末を迎えて世界は大きな変革のさなかにある。とりわけ情報化が我々の生活に及ぼしつつある影響は産業革命がそれ以前の社会に及ぼした影響をも凌駕するのではないかとすら言われている。いずれにしても現在進行中の変化が人々に期待ばかりではなく、不安をも同時に抱かせていることは間違いない事実であるように思われる。その変化を促すものとしてはさまざまな要因が考えられるであろうが、とりわけパソコンの発達がその最大のものであることは間違いないであろう。

我が国ではいわゆるバブルがはじけて以来、とりわけ上記のような話を聞かされる機会が多くなったように思われる。バブルの夢に浸っている間に世界、とりわけアメリカ合衆国は大きな技術革新を遂げ、さらにはいわゆるリストラにより企業の体力を強靱なものに作り替えて我が国の前に立ちはだかることになった。それまで 21 世紀は日本の世紀などおだてられていささかいい気になっていた人々は冷水を浴びせられたように、震え上がってしまった。近代の日本にとっては「太平の眠りを覚ます蒸気船、たった四はいで夜も寝られず」というペリー提督の浦賀来訪、第二次大戦の敗北に続く第三の衝撃である。

前二回の衝撃に対し日本社会はどのように対応したであろうか。ペリーの来訪には倒幕による王政復古と西欧文明の急速な受容によってそれを乗り切ったのであり、第二次大戦の敗北に対しては進駐軍から押し付けられた日本社会の変革を内面化することにより対応した、と断言するのはいいのではないだろうか。

この内面化は日本国憲法の場合がもっとも典型的なケースであると思われる。押しつけられたものではなく、自主憲法をという声は制定以来存在するものの未だに少数勢力として止まっている点からもこのことは明らかである。いかに日本人が従順だとはいえ、押しつけられた価値観が自らの信条や信念に背くものであった場合、これほどうまく適応できるはずはないからである。また各種世論調査の結果もこの憲法が国民に信任されていることを証明している。

つまり大戦後進駐軍により「押し付けられた」諸改革は日本人が明治の文化大革命により培ってきた（必ずしも言語化されてはいなかったとはいえ）あるべき社会像の実現だったのである。自ら戦いとったものでなかったから日本の民主主義は脆弱だという批判が浴びせられることがしばしばある。そしてそういう側面があることは否定できない。

しかし、日本国憲法の場合、いやでいやでたまらないものを押し付けられた、というわけではなかったこともまた事実であった。そう考えなければ50年という決して短くはない時間が経過しても憲法を新しいものと取り替えようという要求があまり盛り上がりず、むしろこれを擁護しようという意見の方が大勢を占めているという現象を説明することはできないからである。むしろわれわれはアメリカ合衆国から体にびったりあう服をプレゼントされたのである、と考えた方が事実に近いのではないか。50年も同じ服を着続けてきたことの異様さは今ここでは問わないことにしよう。

憲法はさて置き、日本社会では現在リストラ、規制緩和の大合唱である。あまりにも喧しくていささか聞き飽きた人が多いのではないだろうか。規制緩和はなるほど必要であるが、緩和しなければならない規制が存在する一方、新たに作り出さなければならない規制も相当数あるはずなのに、こちらの主張が聞かれることはあまりないように見受けられる。あるいは緩和、緩和の大合唱にかき消されてしまっていてその声が我々のところまで届かないのであろうか。自由化といったところで人間の社会に規制が何もない、などということはありえないことなのである。何が不必要で、何が必要かという議論には慎重でなければと思う。たらいのお湯を捨てようとしてその中の赤子をも同時に捨ててしまうようなことがあってはならないのである。

ところで教育の世界はどうであろうか。このところ教育に関わる話題といえば、いじめ、不登校という問題と、学校制度の見直しが中心を占めているといっても過言ではない。前者は小中高に関して、後者は大学に関して語られることが多い。もちろん大学の世界でもいじめの問題というものは皆無ではないであろう。いじめといえば子どもの世界の専売特許と思っておられる

向きもあろうが、これは大人の世界のいじめの縮小再生産されたものであり、その逆ではない。大学もまた社会を構成する制度の一つである以上社会と無関係ではありえないのは当然である。いじめは日本社会の特殊性も関わりがあると同時に、人間性に根差した根源的な問題であり、恐らくその解決は大学の制度の改革などとは比較を絶した困難な課題であろう。

知識の伝承としての教育は人類の誕生以来の歴史を持つとはいえ、今日われわれの周囲に見られるような学校制度の中で子弟が教育されるようになったのは比較的最近のことである。それ以前は教育といっても親から子に家庭内で手渡されるものであり、主として職業上の技術の伝達を主体としたものであった。その中心を占めるものは日本の農村であれば、水田耕作に関わるものがその主体であったし、それに付随して日用品の制作の技術などもまた伝授された。漁村であれば魚群の探しかた、捕え方、網の繕い方などであったろう。猟師には猟師のそれが、工人には工人のそれがもちろん存在し、親から子へと伝えられたのである。

良く知られているように教育の多くの部分が文字の習得とほぼ同義になったのはさほど古いことではない。数百万年におよぶ人類の歴史のうち教育に文字が介在したのは高々ここ数千年のことにすぎないのである。しかもそれは文字どおりたった一握りのエリートに独占され、国や地域によるばらつきはあるものの、庶民が文字の読み書きを身につけるようになったのはここ百年かそこらのことといっても過言ではない。今日でさえも第三世界では識字率が低く、それが近代化の妨げになっていることは多くの人知っている。それ以前にこうした途上国では学校の校舎も、教科書も、鉛筆消しゴムなどの学用品も不足しているというのが実状である。

我が国が文字を獲得したのは先進文明国に比べればむしろ遅い部類に属するであろう。しかし中国から漢字が到来して以来の文字の習得の速さと文字を駆使した言語表現の成果には恐るべきものがあつた。漢字をいわゆる万葉仮名として用いた外国語の日本語化から始まり、平仮名、片仮名の発明、万葉以来の和歌の隆盛、平安時代に花開いた女流文学という流れを見ると空恐

ろしいほどである。もちろんこの時代の庶民が読み書きを自由にできたわけではない。多くの国や地域と同様この時代にはまだ文字は特権的な存在であり、誰でもがその文字を用いて言語表現ができたわけではない。しかし万葉集には防人の歌など庶民の歌も多数収録されているという事実は諸外国に比して日本では読み書き能力の普及が早かったことを物語っているのではないだろうか。まただいぶ時代は下るけれども、江戸時代には全国に一万を越える寺子屋が存在していわゆる「読み書き算盤」を庶民の子弟に教えていたという事実も読み書き能力の庶民化が我が国では早くから実現していたということも物語っているのではないだろうか。正確な統計がこの時代にあったはずもないが一説には幕末すでに識字率が五割を越えていたともいわれる。事実であれば驚くべきことで今日でも世界には識字率がこれ以下という国も存在しているのではないだろうか。

明治5年の学制の発布以来日本の近代教育が開始されるが、江戸時代以来の蓄積があった我が国では諸外国に比して開始後の歩みは順調だったと評していいのではないだろうか。それどころか今日ではいささか教育過剰気味ですらある。しかしバブルがはじけて以来、またそれと関係があるか否かは不明であるが、少子化による生徒数の減少に伴い教育改革が叫ばれるようになってきたのは周知のごとくである。これは日本だけに見られる現象ではなく、情報化、国際化という大きなうねりが各国に促している先進国共通の動きであることは言うまでもない。時勢の変化に応じ国家枢要の人材を育てるという教育の目的はどの国であれ昔も今もそれ程変わっていないのではないかと思われる。

本稿で取り上げたのはフランスではいかにして人々が文字を習得していったかについて詳述した書物である。我が国でフランスの教育について話題にされる場合には主としてバカロレアとかエナ（国立行政学院）、エコール・ノルマル（高等師範学校）、ポリテクニック（理工科大学校）といったグランド・ゼコールなどの難関校のことに限定されるきらいがある。従ってフランスの有名校の入学試験の厳しさは我が国でもある程度知られている。しかしなが

らここで取り上げた書物はそうした中等高等教育ではなく、フランスで初等教育の普及していく過程を詳述することをその目的としている。

本書の著者はフランソワ・フェレ氏とジャック・オズフ氏である。本書は1977年に刊行された。決して新刊というわけではなくむしろ古典的名著に属するといっているであろう。タイトルは「読むことと書くこと」であるが「カルヴァンからジュール・フェリーまでのフランス人の識字化」という副題を持っている。ということは本書の対象とする時代は16世紀から19世紀ということになるが、実際には17世紀後半から20世紀初頭にかけてのおよそ二百数十年間が記述の大部分を占めている。これは我が国の歴史でいえばほぼ元禄時代から大正時代までに相当する。

本書はおおよそ400ページからなっているのだが、そのうちの相当部分が地図および表に割かれている。地図はそれぞれの年代におけるそれぞれの地域の、文字を読むことも書くこともできない人間、読むことはできるが書くことはできない人間、読み書き両方ともできる人間の比率を男女別に提示しており、一見して本書が膨大なデータの上に成立していることを証拠立てている。19世紀以降については地域別に学校の有無を提示する地図や年齢別の就学率などが地図上にあらわされている。さらに授業方法についても詳細な調査がなされている。ここで授業方法というのは教師が生徒を個別に指導するか、何人かをグループ指導するか、それとも今日我が国でも諸外国でもっとも普通の方法である、一人の教師が数十人の生徒を一緒に教えるかどうかということである。確かに今日でも教室で生徒を個別指導することもないではないが、こうした方法がむしろ普通だった時代や地域があったことは興味深い。さらには宗教が教育にも大きな勢力を振るった国らしく、修道会の学校に通う子どもの比率なども地図化されている。

詳細な調査に基づく多くの地図が掲載されていることは読者にとって非常に有益であることは間違いない。残念なのは本書が上質紙を使用していないため、地図の読み取りに苦勞する場合がないとは言えない点である。また就学率の変化などのグラフも用意されているのだが、それらも指示や注が少な

いたため何をあらわしたグラフなのか一見しただけでは判然としない場合もあるのでさらに細かな配慮が望まれる。

索引のない書物は検索に難儀させられるので、研究書と銘打った書物はぜひとも詳細な索引を持つことが望まれるが、その点では本書の索引は模範的といってもいいほど優れた出来栄である。テーマ別の索引、地名の索引、人名の索引、地図、グラフ、表の索引から成り立っているので、非常に検索が容易になっていると思う。こうした配慮は読者にとっては大変ありがたいことである。

近代において教育制度が確立され、読み書きが学校で教えられるずっと以前から文字は存在していた。洋の東西を問わず、大文明には必ず文字が伴っていた。少なくとも数千年前からそう言ってほぼ間違いのないであろう。しかしこの文字を操ることができたのはその文明を形成した人々のうちのほんの一握りであったことは繰り返し述べた通りである。宗教もまた人類の発生とともにこの世に現れたのであろうが、文字を独占していたのは多くの場合宗教に携わる僧侶や神官であった。そして彼らは文字を独占することにより情報を独占して自らの地位を神秘化し、特権の維持を図ったわけである。識字率の向上、教育の普及ということは従ってこれらの特権階級から文字を奪還し人々の平準化を促すという側面を持つ。そしてそれはフランスの場合も同様だった。

フランス人の識字率がどのような経過をたどって今日にいたったかを知るにはどうすればいいのか、という疑問は誰でもが直ちに思いつく疑問であろう。そして本書の著者たちはどうしてこのような詳細な研究が可能だったのだろうか、という疑問もそれに伴って発生する派生的な疑問ではないだろうか。何せ統計などありえようがない時代が対象なのである。それぞれの時代にそれぞれの地域においてどの程度の人々が文字を読んだり、書くことができたかを知ることはほとんど不可能であるように思われるであろう。

本書の著者たちが目をつけたのは結婚式においてその契約のために残されているサインを調べてそれが自筆によるか否かを綿密に検討することによ

って推計するというものである。フランスにはこうした記録が 17 世紀後半以降非常に良好に保存されているようである。さらに大革命後は徴兵制の施行により徴募兵たちが文字の知識を有するか否かについての資料が大量に蓄積されることになったのである。著者たちは当然のことながらこうした資料を自らの手で発掘したのではない。彼らは資料的には先人たちの努力に、とりわけ 19 世紀末のナンシー大学区長だったルイ・マジオーロのそれに多くを仰いでいる。

マジオーロは 1811 年にフランス東部のナンシー市に生まれた。大学を卒業後教職につき、最後はナンシー大学区長を勤め 1871 年に 60 歳で引退した。彼は退職後フランスにおける初等教育、とりわけフランス人が読み書き能力をどのような経過をたどって身につけていったかを調査しようと決意した。対象とした地域は当初は限定されていたが後フランス全土へ拡大された。

もちろんこうした大事業は彼一人の力に余るものだった。そこで彼は全国各地の教員の協力を仰ぎ、調査を依頼し、その結果を集計したのである。彼の調査に対しては一万六千名にのぼる多数の教員が協力したと伝えられる。調査の対象となったのは 17 世紀後半以降である。17 世紀後半以降のフランスには結婚の際の新郎新婦の結婚契約書が多く残されていたので、それを調査し統計をとることにより新婚の夫婦が文字能力を有していたか否かを知ることができたのである（新郎や新婦が無筆の場合には司祭や助任司祭が代わりに署名したことは言うまでもない）。こうした調査は実はマジオーロ以前から多少は手をつけられていたようであるが、詳しい調査が開始されるにはマジオーロを待たなければならなかったのである。

マジオーロが引退した 1871 年という年号はフランスにとって極めて重要な年である。前年にフランスの敗戦で終わった普仏戦争とそれに続くパリコミュンンの傷痕は未だ癒えずフランス社会は混乱状態にあった。言うまでもないが敗戦というのは我が国の場合に限らず大変な混乱を当該社会にもたらすものである。それとともになぜ戦争になったのか、戦争に負けたのは何が



原因だったのか、という原因の追求が始まるのもまた洋の東西を問わない。

敗戦を機にフランス社会ではその一環として教育の問い直しが盛んに行われた。よく知られていることであるが、それ以前にドイツではナポレオンとの戦争に敗れた原因を究明し教育制度に大きな変更が加えられた。我が国では第二次大戦後それまでのヨーロッパ型の6・5・3・3制に替えて現在の6・3・3・4制が導入されたことはまだ記憶に新しい。

マジョーロが引退したころ戦後処理に明け暮れるフランス社会では共和派と保守派の教育論争が熾烈を極めていた。左右を問わず強い国を作るには教育が大切である、という認識では共通していた。違いは保守派も共和派もフランス人の識字能力の形成にあずかって力があつたのは自らの陣営であることを強硬に主張した点である。

教会で子供たちに教義や聖歌を教えることで子供たちが文字の知識を身につけていったのであると主張する保守派に対し、フランス革命の成果としての学校の充実こそがフランス人の識字能力の向上の原因であるとするのが共和派の主張だった。マジョーロ自身も大革命がフランス人の教育の進展にとってさほどの影響は及ぼさなかったのか、それとも断絶と判断しなければならないほどの大きな変化をもたらしたものであるのかという点には大きな関心を抱いていた。

そうした経緯の中からフランス社会における学校や識字率の変遷を跡付けようという気運が盛り上がっていったのである。今日われわれがフランス社会に関してはこういった点について相当詳細にわたり跡付けることができるのは実にこの教育論争のおかげであるといっても過言ではない。もちろんマジョーロの調査もこのような論争の帰結を自らの手により明らかにしたいという気持ちが強く働いたものと思われる。そしてその結果はフランス革命後識字率が大幅に向上したという事実は認められない、という結果に落ち着いた。

著者たちはルター、カルヴァンらの宗教改革により聖書が重視されるようになったこと（僧侶の独占からの奪取）とゲーテンベルクによる活版印刷の発

明により可能になった書籍の大量印刷の実現とその価格の低下による書籍の購入しやすさという 16 世紀の大きな出来事を識字率の向上への離陸と考えている（大都市では既に中世末から読み書きできる人々がかなり存在した、と著者たちは推定している）。さらに 18 世紀の大革命に関しても平等志向により文字の知識を持たない人々にも文字の習得への意欲を掻き立てた、という点で一定の評価を与えている。ただし著者たちは 1870 年代の共和派の人々のようにはそれが識字率の上昇にとって決定的に重要だったとまでは考えてはいない。

マジョーロの調査は長いこと忘却されていたが、1957 年になってフルリーとヴァルマリの論文によって脚光を浴びた。マジョーロの調査からは既に 80 年近い歳月が流れていた。その後現代にいたるまで同種の調査がおこなわれているけれどもマジョーロの調査と大きく食い違っているという点は見出されてはいない。100 年以上も前のマジョーロの調査の厳密さには高い評価が与えられてよい。

ところで全国の教員からの返事をまとめた結果マジョーロはあることに気づいた。それは識字率の地域間格差が極めて大きいということである。具体的に言えばサン・マロ（フランス）とジュネーブ（スイス）を結ぶ線の北側が高く南側が低いということである。北側というのは北部フランスおよび東部フランスであるが、もっとおおざっぱにフランスの北半分といってもそれ程実状から隔たってはいないであろう。もっともこの線は 19 世紀以降徐々に消滅の方向に向かった。そして今日では全く消滅したとっていいであろう。

北と南というのは今日もいわゆる南北問題として世界の平和と安定を脅かす大きな問題であるが、近世のフランスにおいても際立った対照をなしていたわけである。少し西洋の歴史を学んだ者であればこの相違が中世以来の農業の先進地帯と後進地帯という構図そのものであることに直ちに気づくに違いない。先進地帯と後進地帯の相違はたいていの場合貧富の差とイコールであり、それが識字率の差に相関することは今日でも発展途上国の多くが識字

率の低さに悩み、義務教育の充実に勤めていることを思い起こせばフランスの場合もそれと同様であったことが容易に理解されるであろう。

マジョーロの調査を踏まえながら著者たちは識字率の変化についての考察を、読むことも書くこともできない者、読むことはできるが書くことはできない者、読むことも書くこともできる者という具合に細かく分けて考えているのだが、このような考察に耐えるだけの資料が少なくとも17世紀以降のフランスに貯えられていたことには驚きを禁じ得ない。我が国で同様の調査を行おうとした場合、どのあたりまで遡ることができるであろうか興味深い。恐らく我が国にはこうした調査に耐えられるだけの基礎的な資料は明治以前には存在しないのではなかろうか。

ところで先ほどの結婚契約書のサインの有無についてであるが、自分の名前を書くことができることと、文字を読んだり書いたりすることの相関関係は必ずしも明確でないような気がするのであるが、著者たちは資料の統計的処理によりサインができる者はほぼ読み書き両方の能力を持っていた（もちろん程度の差はあるのであるが）と判断して構わない、という結論に到達している。

上の調査はさらに同一地域においてももちろん職業別、階級による相違が当然ながら存在する事実、都市と農村での識字率の相違などにまで及んでいる。容易に予測できるように上位の階級の方が下位の階級よりも識字率は高かったし、都市と農村とでは都市の識字率は当初は農村のそれを上回っていた。また男性と女性では男性の識字率が常に女性のそれを上回っていた。もちろん現代ではこうした男女差はほぼ解消されているけれどもある時期までは男性が女性を上回るというのが普通だった。従ってある時期からは女性の識字向上率は常に男性のそれを上回った。逆に言えば女性の識字率の低かったところほどその後の向上の速度は大きかったということである。

本書の対象となった17世紀後半から20世紀の初頭といえばフランスではルイ王朝の絶対王政から、フランス革命の時代、ナポレオン時代、王政復古の時代、2月革命とナポレオン三世の時代、普仏戦争の共和制時代（いわ

ゆるベル・エボック)を含む。その間には産業革命と呼ばれる大きな産業構造の転換があり、またそれに起因するフランスを含むヨーロッパ社会の海外進出が行われた帝国時代と呼ばれる一時期を含んでいる。国内においては農村の解体と農地を失った農民の都市への大量流入という現象もそれに付随した。

文字を独占していた僧侶や神官はもちろん文字の普及には反対だった。読み書き能力を多くの人々が獲得することは彼らの特権的地位を危うくするからである。また読み書きの普及と世俗化の進展とは大いに関係があったことは歴史の示すところである。また教会の特権を否定するためルターは聖書を読むことを重視したことは良く知られている。免罪符を買えば罪が許されるなど、聖書のどこにも書かれてはいないからである。上で述べたように聖書の重視と活版印刷による聖書入手の容易さが僧侶という特権階級を突き崩す大きな一撃であったことは疑いを入れない。さらに意外に思われるかもしれないが、啓蒙主義の思想家たちも一般民衆の識字率の獲得にたいしては好意的ではなかった。とりわけ書く能力の習得に対してはむしろ反対していた者が多かった。自分たちのエリート性を保証している能力を民衆が獲得することは自らのエリートとしての立場を危うくするからである。これは今日大学進学率が上昇すればするほど大学の特権性が失われて大学や大学生に対する社会的な評価が低下するといった現象とも無関係ではない。

読み書き能力の普及はまた老人の地位をも危うくするものだった。文字を持たない社会では農耕牧畜の知識もまた老人が記憶している知識を子どもへと伝えていくものであった。しかしながら文字が通用する社会ではそれは文書として保存することが可能になったのでその知識は老人の占有物ではなく、すべての人々の共有財産になってしまうからである。つまり誰でもが、いつでも、どこでも利用できるものになり必ずしも親から子へと伝えられるものである必要もなくなったのである。さらに記録された文書同士を比較検討することにより、誤りを発見したり、改良することもはるかに容易になった。聖職者が権威を喪失していったのと同じように老人の権威もまた弱まっ

ていったのである。現代の老人受難時代は教育の普及のためであるといえは言い過ぎであろうか。

読み書きの普及は宗教家や老人の権威を危うくしたばかりではなかった。それは体制を倒すだけの力を持つにいたったのである。著者たちが引用しているある研究者の説によれば、英国での 17 世紀の革命、1789 年のフランス革命、1914 年のロシア革命はそれぞれの社会において男性の半数が読み書きの能力を身につけた段階で発生したものであるそうである。

我が国の明治維新の場合についてはどうなのか知りたいところであるが、寺子屋の普及を考えるとやはり男性の場合その半数近くは文字を読み書きする能力を身につけていたと考えてもそれ程現実とかけ離れていないと思われるがいかかなるものであろうか。

フランスでは第一次大戦の直前の調査で若い人の識字率はほぼ 100% に達していることが確認された。すなわち 1906 年の徴兵検査では 94.9% の若者が氏名を記入することができたし、1901 年から 06 年までの結婚時の署名は新郎が 97.1%、新婦が 94.8% に達したそうである。もちろん年配者はこれよりも低かったから全ての年齢層で 100% というわけにはいかなかったものの、若い世代だけに限定すれば「読み書き」能力の養成という初等教育の理想は 20 世紀の到来とともにほぼ達成されたといえるのではないだろうか。

文字の能力、とりわけ書く能力を身につけることは個人を確立させることとイコールであるという認識を著者たちは述べている。確かに話す場合に比して、書くことは書く人と書かれる内容との間に距離が存在するため、客観性を獲得しやすく、個人主義へと導きやすい。文章を記述する能力が人間に付与する内面と、王制や帝政といった政治形態とは相容れないものなのであろう。著者たちはこの点については明言してはいないけれども、そう断言しても著者たちの考えから大きく隔たってしまうことはなさそうである。

本書はフランスにおいて識字率、就学率の変遷を時代別、地域別に多くの資料を駆使することによって明らかにし、なぜある地域では就学率が低かつ

たのか、また別の地域ではなぜ人々が熱心に文字の習得に励んだのか、という点にまで考察が及んでいて極めて興味深い研究書である。もちろんこの書物で述べられている事実や判断の妥当性については教育学や教育史を専門としない筆者には判定は不可能であるが、研究書にありがちな専門家以外には歯が立たないようなそっけない書物ではなく、フランスの歴史や社会に興味がある人や、さらには教育に関心のある人にとっては大変面白く読むことができ、かつ有益な本ではないかと思う。

著者たちの努力によりフランスの古い時代からの学校や識字率の変遷についての知識を我々は容易に手に入れることができる。ところで著者たちは無条件に学校教育や読み書きの重視に賛同しているわけではないということ指摘しておかなければならない。それどころか先進国で識字率がほぼ 100% に達した 20 世紀にそれまで経験したことのない大きな戦争を一度ならず二度までもヨーロッパは引き起こしたことを例にあげ、学校教育万能論には疑問を呈している。その点では著者たちが本書を執筆する一つのきっかけを作ったともいえるマジョーロが学校や読み書き能力に対して抱いていた全幅の信頼とは大きく隔たっているといわなければならない。マジョーロが資料の収集に努めていた時代と、著者たちが本書を執筆した間にはちょうど百年という歳月が横たわっているが、その間に教育観、学校観もそれだけ変化したわけである。

本書が刊行されたのは 1977 年である。近代の学校制度の行き詰まりを打開する一つの手段として著者たちは読み書き主体の教育のほかに映画、ラジオ、テレビという音声や映像の導入による教育の可能性に期待を抱いているようである。もちろん今から二十年前には既にコンピュータは存在はしていたものの、パソコンだのマルチメディアだのインターネットという言葉は存在していなかった。もしこの本が今日執筆されたならば、こうしたメディアも教育をより良いものにするための有力な手段として追加されたことは確実であると思われる。